

硫黄島の観光に対する一提言

舟久保昇（人文社会科学研究所修士課程2年）

島の魅力を外部の人に向けて発信するためには三島村に限らず、まず島に来た観光客や、まだ訪れたことのない人々が島にもつイメージを島民の方としても把握することが必要になる。とりわけ、目立った観光資源に乏しい離島においてその必要性は上がるだろう。

とはいえ、島に住んでいては自分たちの島に対してなかなか認識の及ばない部分もある。そこで本レポートでは、硫黄島を初めて訪れた筆者が印象づけられた事柄を述べてみたい。1泊2日の現地研修では島に滞在する時間も短く、島内部のことへ踏み込んだ意見をするには及ばない日程ではあったが、その代わり第一印象としての硫黄島を述べることができる。これは硫黄島を訪れたいずれの人々に当てはまることだが、まず島に降り立ったときの印象、それも感覚的なレベルで抱いた印象というのは、少なからず島が観光客に見せる表面の顔を顕しているともいえる。

1. 「心の観光」をめざして

「心の観光」とは、フェリーみしまが鹿児島港を出港する際に、サロンにて三島村村長が語った言葉による。村長の語られた「心」というのは様々な解釈ができるが、ここでは「感情を揺り動かすもの」と捉えて、今回巡見したところが与えた印象を自分なりに述べてみると以下のようなになる。

1. 露天風呂（東温泉）…雄大さ（波濤・大海原）／秘（秘湯）／満足感
2. 海…驚き、奇妙さあるいは幻想的（赤い海から青い海へ。或いは世界屈指の海であること）
3. 俊寛伝説…哀／無念
4. ジャンベ体験…楽／笑
5. ジャンベの送迎…感動的（島を離れるフェリーの演出に華を添える）切なさやありがたさ
6. 硫黄岳…雄大さ／奇妙さ
7. クジャク…珍しさ

このようにみると、硫黄島には観光客に与える感動の諸相が様々であることがわかる。また今回は見るができなかったが、メンドンや柱松をはじめとした祭りには秘祭イメージがある。そして島民と接する機会があることも、真の「心の観光」にとって必要なことではないだろうか。もっともそのためには、観光客側がモラルとマナーを遵守することが求められるので、来島者への注意事項等の情報提供をする必要がある。

こうした「心の観光」を目指すことの利点のひとつには、少なからず、島が人間の感情の内部に汲み入ることができる可能性を示している。それはハコモノ施設と同じような一元的な「観光資源」として処理してしまうには質が異なる部類になるだろう。なぜなら観光客と島側の意見の相互作用によって成立する事柄だからである。

また、「心の観光」を三島村全体で掲げることは、それぞれの島ごとにおいて歴史や自然環境が異なるために、お互いの島の特色を活かせる強みともなり得る。あとはそれをどの

ように伝えるかが課題になるだろう。島の魅力を表面的に紹介しただけのパンフレットでは伝えきれない部分もある。なので、より一層の情報提示が求められる。散見したところでは、名所の入り口にたつ看板の劣化などは早急に改善することが望まれる。

2-1.島の物産を活かす…イスズミの例

旅荘「ほんだ」さんにて夕食を頂いた。料理は島で捕れた魚を中心とした献立であったが、そのなかでもイスズミを使っている料理が目にとまった。イスズミは基本的にはその磯臭さ故に流通しない磯魚であり、都会でこれを食べる機会は無とっていいだろう。しかし、「ほんだ」さんのイスズミは臭みもなく味のしっかりした上品な磯魚であった。

イスズミは一般にいえば無価値魚である。しかし、それ故に「島でしか食べられない魚」そして「都会にないもの」であり、特産品となり得る可能性を秘めているのではないだろうか。島民の日常食に用いられる食材は、本人達には価値を見出しづらいかもかもしれない。けれども、そうした食材こそが「硫黄島らしさ」を演出する要素でもある。こうした無価値魚ほど、島で食べることが出来る故の付加価値としてのイメージは、観光客にとって食味以上に物珍しさや新鮮さといった感動を与えることを留意しておく必要があるだろう。無価値魚を有効利用することは、ひいては魚資源の有効利用にも繋がる利点もある。

- ・ 地元の食材（イスズミ）：無価値魚＝特産／島でしか食べられない魚
- ・ 無価値な食材を島内で有価値物へ転換させる＝資源の有効利用
- ・ “都会にないもの”＝イスズミなどの磯魚・大名竹

2-2.島の物産を活かす…竹

島中に蔓延る竹といえども、場所によっては空間演出の材料となりうる。特に俊寛堂へ続く竹の小道は、鬱蒼としたなかに曲がりくねる苔むした地面に調和していて、南の島であることを忘れさせる印象を与えた。そしてそれが悲話なる俊寛伝説の舞台の地であるということが、訪問する者にとって尚さら神妙な気にさせる。このように空間演出としての資源の利用は他にも用途がありそうに思える。

3.おわりに

以上、短い報告ではあるが、筆者が硫黄島研修にて感じ得たことを書いてみた。第一印象としては、鹿児島から片道 4 時間程度の丁度よい船旅に加えて、訪れる人の感性を満たす名所や景色が島のなかにバランスよく点在しているために、1 泊の旅程であれかなりの充実感を得られた。これらを観光資源として捉えて新たな措置をとるか、あるいは現状のままにするかの選択は島民の方々の意見に委ねたい。あくまで観光とは島民の方々のコンセンサスを得られなければ必ず行政や観光客側とのあいだに齟齬や軋轢が生じるだろう。したがって、本レポートはあくまで、「ある観光客の一見したところの硫黄島の印象」程度に留めて参考にしていただければ幸いである。